◎グランプリ賞
作品名『テレビの前』

作者／長尾恵那さん（沖縄県沖縄市）

帰省するとよく目にする光景。くつろぐ父の姿は、なんだかおかしくて、ひきつけられます。我が「ふるさと」の大きな魅力です。（作者コメント）

グランプリ決定！

第14回公募展木彫フォークアートおおや

日本文化の原点とも言える「木」を見直そうと、平成6年に始まった木彫フォークアートおおや。14回目を迎える今回は、全国各地から125点の個性あふれる木彫作品が寄せられました。

9月16日には、審査講評会がおおやホールで行われ、県立美術館名誉館長の木村重信審査委員長をはじめ4人の審査委員が入賞作品4点と入選作品40点を選出。また、9月22日から30日までに作品見学に会場を訪れた人が投票で選ぶ「大衆賞」も決定しました。

入賞作品と実行委員会特別賞受賞作品は、木彫展示館（大屋町大杉）に収蔵され、常時展示されることになります。

各賞を受賞した温もりあふれる木彫作品を紹介します。

審査評（抜粋）

フォーク・アートとは、要するに生活に密着した芸術のことで、その特色は発生や展開や表現が庶民の感情や感覚と深く結びついているところにあります。

グランプリ賞を受賞した長尾恵那さんは、「テレビの前」に横たわる人を巧みなノミさばきで量感豊かに表現して、ユーモアをただよわせています。これに反し、養父市ふるさと賞の吉本克之さんは、魚を荒く造形して、生（あら）きものや新（あら）きものを表しています。

そして、山田洋次記念賞の谷口智宏さんは、いすに座って回想する老婦人を静謐（せいひつ）に表現して、「金色に輝いたとき」と題し、優秀賞の桐常夫さんは、白いうさぎと黒い古タイヤを組み合わせて、異質なものの出会いによる超現実的なイメージを喚起させます。

このような諸作品に、入選の中尾健二さんの作品「しずやしず」のような伝統的人形の系譜を加えると、本展出品作の傾向のほとんどを網羅したことになります。さらに、具象・抽象といった様式、求心的・遠心的という空間性、加算的・減算的といった造形方法なども、極めて変化にとんでいます。このような「フォーク・アート」の豊かさや面白さを心ゆくまで楽しんでほしいと思います。

審査委員長　木村重信（兵庫県立美術館名誉館長）